

# 大分県医師会館 (1960) の増築の方法に関する研究

2019年11月8日 1X16A088-5 但馬浩介

## 目次構成

### 第1章 本研究について

- 1-1. はじめに
- 1-2. 研究背景
- 1-3. 研究目的
- 1-4. 研究方法
- 1-5. 論文構成
- 1-6. 既往研究
- 1-7. 用語

### 第2章 大分県医師会館旧館

- 2-1. はじめに
- 2-2.1950年代末の建築的状況
  - 2-2-1. 戦後の都市の問題
  - 2-2-1. 鉄筋コンクリートをめぐる問題
- 2-3. 誕生のいきさつと建物の概要
- 2-4. 大分県医師会館旧館の形態
  - 2-4-1. 都市的建築の概念
  - 2-4-2. 鉄筋コンクリートの新しい表現
  - 2-4-3. 形態の参照
- 2-5. 小結

### 第3章 大分県立大分図書館

- 3-1. はじめに
- 3-2. 1966年頃の建築的状況
- 3-3. 誕生のいきさつと建物の概要
- 3-4. 大分県立大分図書館の形態
  - 3-4-1. 設計原理および第一次案
    - 3-4-1-1. 《プロセス・プランニング》の概念
    - 3-4-1-2. 《プロセス・プランニング》の方法
    - 3-4-1-3. 《プロセス・プランニング》とメタボリズム
    - 3-4-1-4. 《プロセス・プランニング》と「第一次案」
  - 3-4-2. 最終案
- 3-5. 小結

### 第4章 大分県医師会館新館

- 4-1. はじめに
- 4-2. 1970年代はじめの建築的状況
  - 4-2-1. ポストモダン・前夜
  - 4-2-2. 〈手法〉について
- 4-3. 建物の概要
- 4-4. 大分県医師会館新館の形態
  - 4-4-1. 「接続」の方法
  - 4-4-2. 「意味」の発生
  - 4-4-3. 〈空間〉の構成
- 4-5. 小結

### 第5章 考察

- 5-1. はじめに
- 5-2. 大分県医師会館新館の位置付け

### 第6章 結論

- 6-1. 結論
- 6-2. 参考文献
- 6-3. 図版出典
- 6-4. 謝辞

## 第1章 本研究について

### 1-1. はじめに

本論文の研究対象は建築家・磯崎新（大分市生まれ：1931年7月23日～現在）の異形ともいうべきデビュー作「大分県医師会館」（1960）である。特にその増築の所作において特異な近代建築と思われる。本論文では、その方法の意義について論じられる。

### 1-2. 研究背景

これまでのところ大分県医師会館の「新館」（1972）の設計にスポットが当てられることは少なかった。実際、大分県医師会館新館についての批評の大部分が設計者本人によるものであると言っても過言ではない。しかしそれは、大分県医師会館新館がその内容や質において他と劣っていたというような単純な事情によるものではなくむしろ、それが完成した「1972年」という年が建築界にとっていわば「豊作」の年であったと考える方が妥当である。大分県医師会館が近代建築史的な意味でまず興味深いと思われるのが、竣工から増築までのこの合間がちょうど1960年代を内包している点であると考えている。

### 1-3. 研究目的

本論文の目的は、「大分県医師会館（1960）がどのように増築されたのか」ということを通じて、「大分県医師会館新館」（1972）が磯崎新のそれまでの建築活動の中で、どのように位置づけられるかを明らかにすることである。

### 1-4. 研究方法

まず、大分県医師会館旧館と大分県立大分図書館（1966）を比較する。その後、大分県医師会館新館がそれらと比較してどのように位置付けられるか調べる。この時、磯崎が書いた文章や以上の建築が論じられた文章を渉猟しその整理を行う。何故、最初に比較からはじめるのかは、既往研究と本研究との関連において説明される。

### 1-5. 論文構成

大分県医師会館旧館と大分県立大分図書館を比較し、その後大分県医師会館新館がそれらに比してどのように位置付けられるか調べるという方法が明確になるように、第一章に続く本論を3つの章に分けて、第2章を大分県医師会館旧館に、第3章を大分県立大分図書館に、第4章を大分県医師会館新館にそれぞれ割り当てた。それぞれの章は、まずそれらの建物が竣工した年の建築的背景を確認し、形態論へつづくという構成がとられている。続く第5章で、考察が述べられ第6章で論文の結論が述べられる。論文構成は図化すると以下の通りである。

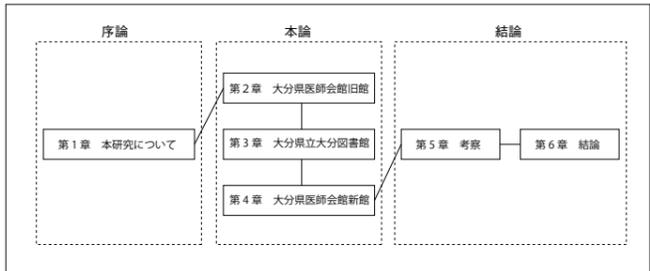


図1. 論文構成

### 1-6. 既往研究

大分県医師会館と大分県立図書館、大分県医師会館新館との関連性について研究した既往研究は以下の通りである。

#### ●原広司「磯崎新論－弁証法考－」『新建築』1966年10月号

この研究において重要な指摘は以下の三点である

- ①メタボリズムの思想と磯崎新のプロセス・プランニング論にみられた思想が対極をなしている
- ②磯崎の基本的な設計態度が、「事象の弁証法的展開」に基礎付けられている。
- ③大分県医師会館旧館と大分県立大分図書館が設計方法論の上で対比的である。

以上の1、2、3より、原はこの論文で、メタボリズムと《プロセス・プランニング》の全体性をめぐる対立、そして「かたち」（これは空間の対義語として「量塊」と呼びかえて差し支えないだろう）と「空間」の相補的な関係、さらにそれらの対立から出発する「弁証法的建築の展開」を展望している。大分県医師会館の新館を考えるにあたってまず医師会館の旧館と大分図書館の関係性を比較しなければならないと考えた理由は、その二つの建物が設計方法論の上で対極的な位置付けがなされているからである。それゆえに、新館の設計方法をみていくの旧館との関係のみならず図書館との関わり合いを含めた広い視野でみる必要があると思われた。

#### ●ケネス・フランプトン「巨大建築の台頭と凋落－磯崎新とメタボリズムの危機一九五九ー六六」『GA ARCHITECT 6 ARATA ISOZAKI 1959-1978』、1991年

この研究において重要な指摘は以下の二点である。

- ①大分県医師会館旧館がメタボリズムの成長のシステムと親和的である。
- ②大分県立大分図書館を空間的な建築として歴史的な位置付けを与えた。

フランプトンのこの論文によって、大分県医師会館旧館の考え方がメタボリズムと親和的であり、大分県立図書館が日本近代建築の伝統と対立することで空間的な特質を獲得したことが明らかに指摘された。

そして、以上、原とフランプトンの研究をあわせると、次のようなことが導かれる。すなわち、大分県医師会館旧館と大分県立大分図書館はメタボリズムの概念を中間要素として「都市の〈全体性〉」をめぐる対立関係を形成している。

本論文では、以上の研究が明らかにした諸関係を下敷きにして大分県医師会館新館の位置づけを考えていく。

研究背景において述べたように、大分県医師会館新館に関してはまとまった研究が確認されなかった。

建築批評家・三村翰（1942～）は『新建築』誌の1972年10月号（磯崎新特集号：「磯崎新1967-1972」）において大分県医師会館新館について言及したが、その内容は、磯崎自身が〈手法論〉のなかで位置付けした内容からはずれない平易な位置付けにとどまるものであった。

1972年において磯崎は、自身のそれまでの活動を総括する〈手法論〉を発表する。これに伴い、国内の主要建築雑誌2社によってそれぞれ特集号が組まれたと思われる。このような状況はこの時代、磯崎への批評が単一の建築に対してよりもその活動の総体へ向きがちであったことを示唆すると思われる。

## 第2章 大分県医師会館旧館

「当時私をとらえていた2つの課題を、この小さい建築に無理に押しこもうとしている。ひとつは都市的建築の概念であり、もうひとつは鉄筋コンクリートの新しい表現である。」（GA ARCHITECT6〈磯崎新1959-1978〉、A.D.A. EDITA Tokyo, 1991年）



図2. 旧館外観

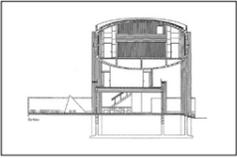


図3. 東西方向断面図

### 2-1. はじめに

本章では、大分県医師会館旧館が設計された1959年頃における歴史的文脈を確認して、その形態論へ記述を進めていく。建築的背景をみていく上で、磯崎が上で言及したような「都市的建築の概念」と「鉄筋コンクリートの新しい表現」ということばの意味が明らかになるよう注意している。

### 2-2 .1950年代末の建築的状況

本節では、大分県医師会館旧館が設計された1950年代末の歴史的文脈を読み解く。テーマとしては大きく、「戦後の都市の問題」と「鉄筋コンクリートをめぐる問題」にわけて整理してある。戦後の都市の問題に関しては、布野修司の『戦後建築の終焉』を主に参照しつつ、建築家の都市への関わり方について当時の建築雑誌を当たりながら記述を行なった。鉄筋コンクリートをめぐる問題は、長谷川堯の『神殿が獄舎か』を主に参照しながら、当時の建築雑誌を当たりつつ、記述を行なった。

### 2-3 .誕生の経緯と建物の概要

（省略）

### 2-4 .大分県医師会館旧館の形態

本節では、大分県医師会館旧館が「都市的建築の概念」と「鉄筋コンクリートの新しい表現」を企図して設計されたことを踏まえて、磯崎新の設計当時の文章や、のちに当手を振り返って記述された文章を整理し、記述を行なった。まずは、大分県医師会館の設計がなされる前に行われた計画「高崎山万寿寺別院計画」を振り返り、そこに当時の丹下研究室で取り組まれていた柱・梁の鉄筋コンクリート造による表現やコア・システムによるプランが見られることを指摘する。続いて、大分県医師会館の設計中の途中案についても言及し、そこにおいても丹下研究室で取り組まれた問題設定が見いだせることを指摘する。そして、最終案では、それが「東大寺南大門」、「飛行機」、「汽船」、「植輪」といった具体的な造形物にそのイメージを得たことを踏まえて、大分県医師会館が「かたち」を徹底して追求した形態であることを指摘した。

### 2-5 .小結

本論で明らかになった大分県医師会館旧館の特質は次の二点に集約される。すなわち、  
イ：〈全体性〉の示唆――（通し番号①）  
＝都市の〈全体性〉を志向した点においてメタボリズムとの親和性  
ロ：〈量塊〉へのまなざし――（通し番号②）  
＝建物を外部からみたときの視覚効果への関心すなわち量塊と空間という排他的な二要素のうち〈量塊〉へのまなざしによって建築が捉えられた。

## 第3章 大分県立大分図書館

### 3-1. はじめに

本章では、大分県立大分図書館が設計された1966年頃における歴史的コンテクストを確認して、その形態論へ記述を進めていく。図書館の形態については、「第一次案」（1963）と実現された「最終案」から、その発展的な設計の過程をみていく。それにあたって、「第一次案」と一緒に発表された文章「プロセス・プランニング論」（『建築文化』1963年3月）の内容を詳解し、その後実現された最終案が第一次案からどのように変わったものなのかをクロノジカルに追って大分県立大分図書館に関する章とする。



図4. 大分県立大分図書館外観

### 3-2 .1966年頃の建築的状況

本節では、大分県立大分図書館が設計された1966年頃の歴史的コンテクストを読み解く。そこではまず1960年代を通して支配的なイデオロギーを形成したメタポリズム・グループを取り上げ前章で確認した「戦後の都市の問題」が形態として顕在化する過程を記述した、その際は布野修司の『戦後建築の終焉』を主に参照した。そこで磯崎新のプロセス・プランニング論がこの時期多く提出された都市と建築を結び方法論の一つとして存在することを位置付けられることに触れている。

### 3-3 .誕生の経緯と建物の概要

（省略）

### 3-4 .大分県立大分図書館の形態

本節では、大分県立大分図書館の設計原理としてその「第一次案」（1963）とともに発表された文章「プロセス・プランニング論」（『建築文化』1963年3月）に関する内容を記述した。そして、第一次案が《プロセス・プランニング》を直裁に引き受けたものとして紹介し、それが実現された最終案に向けてどのように変更が加えられたのかをクロノジカルにみていく。磯崎が「第一次案」を発表してから赴いた海外の市庁舎を視察するたびにおいて、これまでに日本にはなかった太陽光線が織りなす「空間」とそれを支える「架構の力」であった。磯崎は、二枚の壁に囲まれた天空から太陽の光が差し込む空間を仕立てて第一次案に組み込み日本的な空間と質を異にする西洋的な「空間」の獲得を試みた。参照したのは、磯崎による、発表当時の文章とのちにその設計や意図を振り返った文章である。（ex. 磯崎新『建築の修辞』美術出版社、1984年／『《現代の建築家》磯崎新』（SD編集部編、鹿島出版会、1990年5月10日）他）

### 3-5 .小結

本章で明らかになった大分県立大分図書館の特質は次の二点に集約される。すなわち、  
イ：〈全体性〉の破棄……………（通し番号⑤）  
＝メタポリズムの思想が〈全体性〉を保存するものであったのに対して磯崎の「プロセス・プランニング論」はその対極的な方法論である。  
ロ：〈空間〉へのまなざし……………（通し番号⑥）  
＝磯崎は、西洋の建築を身体的に通過する体験を経て、「架構の力」と太陽光線が織りなす「空間」の効果に打たれ第一次案を編成した直した。

## 第4章 大分県医師会館新館

### 4-1. はじめに

シリンダーを空中に持ちあげた旧館の設計の時点では、かならずしも将来の増築計画はなく、それ自体で完結したものだだった。それが、12年後に、大分県医師会の活動の変化に応じて、約三倍の容積をもつ新館を旧館に横付けする設計が行われることになった。本章では、大分県医師会館新館が設計された1972年頃における歴史的コンテクストを確認して、その形態論へ記述を進めていく。

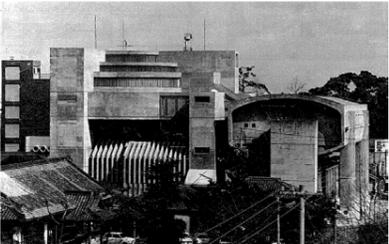


図5. 大分県医師会館新館 外観

### 4-2 .1972年頃の建築的状況

本節では、大分県立大分図書館が設計された1972年頃の歴史的コンテクストを読み解く。主に参考にしたのは、布野修司『戦後建築の終焉』と中谷礼仁「ポストモダン前夜」（『新建築』70巻13号1995年12月10日発行）である。そこではまず、1960年代なるものへの反動として多種多様な近代建築批判のアプローチが行われたことにふれ、その様相が「ポストモダン前夜」と呼び習わすほかない多義的な領域を内包する時代であったことが記述される。そして、磯崎新の〈手法論〉がそのアプローチの一つであるという位置付けを踏まえ手法論の説明を記述した。手法論は、磯崎自身によってその60年代の活動が反省的に統合するもので、大分県医師会館新館の発表と同じ年に発表された。

### 4-3. 誕生の経緯と建物の概要

新館の構成は、最上階の大会議室とそのほかの部分とに大きく分けられる。大会議室は古代ギリシャの半円形劇場の形式をとった会議室である。その他の空間は、ホール、事務室、地域情報交換室、会長室、図書館と行った室が用途に応じたかたちをとりながら、少しずつレベルを変え配置され、全体で三層に吹き抜けた事務空間を形成している。

### 4-4 .大分県医師会館新館の形態

本節では、大分県医師会館旧館の形態に対して、どのように旧館と〈接続〉したか、そして増築というアクションに対してどのような解釈を行ったか、そして建物としてそのかたちと空間にどのような意図を込めたかの三つの観点から記述していく。この新館に関しては、雑誌発表当時の文章を磯崎ではなくアトリエスタッフと思われる人物によって書かれていることが多く、主に磯崎がその設計を振り返って述べるところを参考にしながら記述がすすめられた。

### 4-5 .小結

本章で明らかになった大分県立大分図書館の特質は次の二点に集約される。すなわち  
イ：〈反転〉の手法……………（通し番号⑤）  
ロ：〈メタファー〉の導入……………（通し番号⑥）  
大分県医師会館新館では、増築というアクションに対して形態上アンビヴァレンスな関係を取り結びながら「観念的」に両者を関係付ける〈意味〉を付加した。手法における〈梱包〉という手法は〈意味〉によって根拠づけられた空間の異化作用の結果である。そして、かつて外部にあった〈量塊〉を、内部にとりこみ〈空間〉を支える要素へ還元するという増築ならではの仕掛けを空間にいれ込んだ。

## 第5章 考察

小結で確認した通し番号をまとめると以下の通りである。

- ①〈全体性〉の保存……………（旧館）
- ②〈量塊へのまなざし〉……………（旧館）
- ③〈全体性〉の破棄……………（大分図書館）
- ④〈空間〉へのまなざし……………（大分図書館）
- ⑤〈反転〉の手法……………（新館）
- ⑥〈メタファー〉の導入……………（新館）

まず、大分県医師会館旧館と大分県立図書館の間に以下のⅠ、Ⅱ関係性が認められる。

#### Ⅰ：都市の全体性をめぐる対立

【①〈全体性〉の示唆】↔【③〈全体性〉の破棄】

#### Ⅱ：量塊と空間の相補的關係

【②〈量塊〉へのまなざし】↔【④〈空間〉へのまなざし】

Ⅰに対して、⑤はその対立を止揚する方法であったといえる。それは都市と建築の関係性において成立する全体性の概念と、位相を異にする領域において旧館との結びつきを構想した点にある。すなわち、用いられた〈反転〉という手法は、磯崎がこの増築というアクションに対して示した「肯定とも否定ともつかない対応物をつくる」（磯崎新「反建築論的ノートⅠ」『建築の修辞』美術出版社、1984年、p.27）とする基本方針を直裁に表現したものだだった。

Ⅱに対して、⑥はその「対立」〔原広司は、「磯崎新論－弁証法考－」（『新建築』、1966年10月号）において、磯崎の弁証法的な事象の把握の仕方のもとでは、「かたち」と「空間」の相補的關係を対立として捉えられることを指摘した。〕を止揚する方法であったといえる。すなわち、先行する「積層する雲」という具体的なモチーフに対して、かたちと空間が相互に協力しあい建築の形成に向けて、ついていく過程を見いだすことができる。

## 第6章 結論

「大分県医師会館新館」（1972）は「大分県医師会館旧館」（1960）と「大分県立大分図書館」（1966）という1960年代の磯崎の両極を示す建築と比べて、そのどちらの設計方法にも拠らない高次の設計方法に支えられたことで彼の60年代の設計方法論を発展的に総括した内容と形式をもつものである。換言すると、大分県医師会館（1960）の増築の方法は、都市の〈全体性〉と量塊と空間の〈相補性〉をめぐる2つの対立関係を止揚する二重の弁証法的展開である。以下は結論を説明するダイアグラムである。

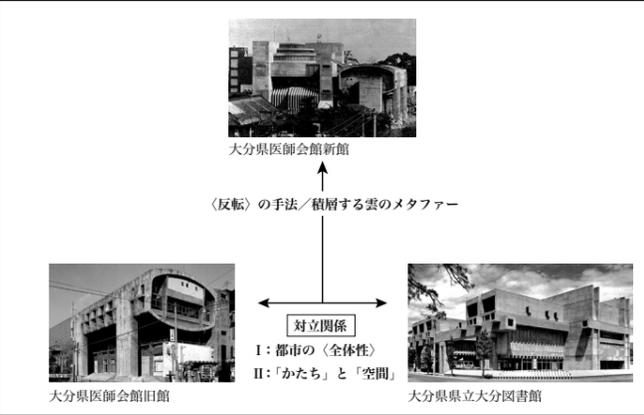


図6. ダイアグラム

## ●参考文献（刊行年代順）

- 野田俊彦「建築非芸術論」『建築雑誌』1915年、第346号  
山田守「吾人は如何なる建築を造るべきか」『分離派建築会作品集Ⅰ』、1920年  
「新しいコンクリート工法」『建築文化』、1950年5月号  
T.K.D「静岡の街から」『建築文化』、1950年7月  
「住宅建築の問題点」『建築文化』、1959年2月号  
丹下健三、大谷幸夫、浅田孝、磯崎新「建築家よ都市像をもとう」『建築文化』1959年6月号  
磯崎新「豊作飢饉－1959年の作品をかえりみて－」『近代建築』1959年12月号  
磯崎新「高崎山万寿寺別院計画」『近代建築』、1960年6月  
磯崎新「シンボルの再生」『近代建築』、1961年2月号  
磯崎新「設計プロセスを通して考えよう」『建築文化』1961年4月号  
磯崎新「プロセス・プランニング論」『建築文化』、1963年3月号  
磯崎新「日本の都市空間」『建築文化』、1963年10月号  
磯崎新「媒体の発見」『建築文化』、1965年1月号  
磯崎新「年代記的ノート」『建築』、1965年2月号  
原広司「磯崎新論－弁証法考－」『新建築』、1966年10月号  
磯崎新「見えない都市」『展望』、1967年11月号  
長谷川堯「日本の表現派」『近代建築』、1968年9、10、11月号  
村松貞次郎「鉄筋コンクリートの歴史（第二回）」『コンクリートジャーナル』、1968年11月  
磯崎新「何故手法なのか」『a+u』、1972年1月号  
磯崎新「概念として引き出された7つの手法」『a+u』、1972年1月号  
磯崎新「大分県医師会館新館」『建築文化』1972年4月号  
磯崎新「反建築論的ノートⅠ」『建築文化』、1972年4月号  
磯崎新「〈手法〉について」『新建築』、1972年8月号  
磯崎新「引用と暗喩の建築」『建築文化』、1978年9月号  
『《現代の建築家》磯崎新』SD編集部編、鹿島出版会、1990年  
GA ARCHITECT6〈磯崎新1959-1978〉、A.D.A. EDITA Tokyo、1991  
ケネス・フランプトン「巨大建築の台頭と凋落－磯崎新とメタポリズムの危機一九五九－一六六」『GA ARCHITECT 6 ARATA ISOZAKI 1959-1978』、1991年  
布野修司『戦後建築の終焉』れんが書房新社、1995年、p.30  
狭間久「大分が選択した保存再生のシナリオ」『建物が残った』岩波書店、1998年  
磯崎新「建物が残った－大分県立大分図書館をめぐる言説－」『建物が残った』、1998年  
石田頼房『日本近現代都市計画の展開』自治体研究社、2004年  
笠木忠昭「大分県医師会館は何故クラッシャーの霧として消えなければならなかったのか」『建築士大分春季号』大分県建築士会、2007年4月  
磯崎新、日笠直彦『磯崎新インタビュー』LIXIL出版、2014年

## ●図版出典

- 図1 筆者作成  
図2 GA ARCHITECT6〈磯崎新1959-1978〉A.D.A. EDITA Tokyo、1991年  
図3 同  
図4 同  
図5 『《現代の建築家》磯崎新』SD編集部編、鹿島出版会、1990年  
図6 筆者作成